

## 爽味なるときに

大塚武夫（修士2年）

ここ栃木県の日光から、東北大学の文学部のある川内キャンパスに、各駅停車の在来線を取り継ぎ、通っていた時期がある。

午前5時に家を出て、車を走らせ、東北本線矢板駅まで行く。車を駅近くの駐車場に置き、黒磯行きに乗り込む。そして、新白河、郡山、福島駅へ向かう。福島駅前からは高速バスに乗り、10時ちょっと前に仙台市中央の広瀬通一番町バス停に着く。そこから徒歩で、あるいは時には走って、お目当ての2校時の講義室へ向かうのである。

新幹線に乗り、宇都宮駅から一気に仙台に行くという方法もあった。しかし、講義に間に合うなら各駅停車の方がいいと思い、朝早く出ることは面倒には思わなかった。それに何よりも、その方が料金も安い。もちろん、車中で読むための本はバッグの中に詰め込んである。

毎回午前5時に家を出ると、夜明けを迎える場所が季節によって変わる。ハンドルを握っている車の中からであったり、電車の車窓からだったりする。

やはり冬になると、電車に乗り込むときはまだ暗い。やがて、外が白むのが車窓から感じられる。東の山の端から、太陽が徐々に昇ってくるのが見える。そんな時は、膝の上のバッグの上に置いた冊子から目は離れ、日の出を拝する。体全体に、呼吸とともに爽味の気を吸収する。

私はいったい、何度、車窓から日の出を拝んできたのだろう。

そんな問いが浮かび、様々な想念が脳裏をめぐる。そして、いかに今という時が、これから展開されるだろう時が、今までとは違った意味で貴重なものであるかを実感する。東北大学でフランス文学を「学ぶ」ということが、今までの多くの関係性から、完全ではないにしろその多くを意識的に免責させてくれることを実感するのである。退職後に再雇用の道を選ばなかった自分から、3人の孫の祖父としての自分から、3人の子供たちの父としての自分から……。

車両は、県境の山間をぬって上っていく。太陽が、一枚一枚と闇のベールをはぐなかを走っていく。やがて見晴らしのよい橋梁を過ぎると、車内放送は次の駅名を告げる。静寂そのものであった車内には、いつもの日常のように学校や職場へ向かう人たちが入ってくるだろう。再び、膝の上のバッグの上に置いた、私のルーティンとして読んでいるヴァレリーの文章に目を戻す。そして、先ほどの続きを見つけ文章を辿っていく。

Car l'analogie n'est précisément que la faculté de varier les images, de les combiner, de faire coexister la partie de l'une avec la partie de l'autre et d'apercevoir, volontairement ou non, la liaison de leurs structures. ...